

今回初めてコンペティションⅡの審査員に参加した。前年との比較が出来ないという特殊な経験だった。ダンスに限らず、映像や服飾、アートの世界でも全く同じなのですが、25歳以下という若い世代において、自分が得意なものや興味のあるものを表現することはまず大事。その後それが「同時代的」にどのような意味をもち得るのか、公に発表する事の意味など、次の段階では突き詰めていてもらいたい。人間の最も初源の「踊る」という表現形態は、「自分の踊り」とどう繋がっているのか。人類の肉体に宿る記憶や身振りは自身の肉体にはどのように残っているのか。自分の肉体のなかに重錘を垂らし、その古層に横たわるものに到達してもらいたい。そして肉体を持得ぬ人間は誰ひとりいない。「踊り」は踊り手に問題だけではなく、われわれ見る側に問題でもあるのだ。

(ヴィヴィアン佐藤)

型のないダンスは真っ新なところから自分でルールをつくり枠をつくる。そしてその枠をどれだけぶち壊せるか…そんな感覚でつくり、踊り続けた私がダンサー目線でみる重要なポイントは「①動きの必然性（必然と実感を持って動いているか）②オリジナル性（その人ならではの）③ユーモア性（観客へひらかれているか）④裏切り（次に何が起こるか予測できずワクワクするもの。自分自身への裏切り）⑤問題意識（既存のものを疑う。個人の限られた世界だけに留まっていないか）」である。でもそんな細かいことはたいしたことないのかもしれない。もっと他に重要なことがあるのかもしれない。コンペではどの身体も、作品も真摯に向き合っていた。どれも嘘はなく本物だった。なぜ、いま、これを踊りたいのか…（コンペⅡ平均年齢）22歳の「いま」を、誰に何を言われてもとことんやり続ける強さを期待したい。賞をとることが大事なのではなく、つくり続けることが大事なのだ。続けること。コンペ出場したことは今後の活動の糧になるだろう。（森下 真樹）

構成力の優れた振付家たちが登場した年だった。またモチーフの選び方に、例年よりも多彩なバリエーションが見られたことは、若手振付家のコンペとして最も目覚ましいことと思う。バレエや、演劇、格闘技ショーなど異種混交のパフォーマンスへの、コンテンポラリーならではの自由なアプローチがそれぞれの作品に強度をもたらした。そのなかでも、鳥の嘴にたとえられる特殊な地形をモチーフにした表現主義的な動き、「日本人らしさ」をテーマとしながら予想のつかないユニークな動き、強靱さと緊張感をそなえた目の離せない動きを実現した3者のクリエイションに注目が集まった。映像審査の段階から飛躍的にブラッシュアップされていたことも審査のポイントとなったと言えるであろう。若いダンサー/振付家の方たちに常に伝えたいのは、自身の日常や自意識を過大評価することなく、広く、遠くに視線を投げかけること。その果敢なところを目の当たりにした一連のショーイングは、とても見応えがあり、スリリングだった。（住吉 智恵）

年を追うごとに充実の度を増していることを強く感じた4年目のコンペⅡだった。会場となった2階スペースは天井が低く、照明も限られている。映像効果も使えない。余計なものを削ぎ落としたなかで、作品の構成力、空間の捉え方、そしてダンサーとしての力量すべてが露わになってしまう。要求されるものは大きい、全体のレベルはいままで以上に高く見えて楽しかった。とりわけ大きな可能性を感じさせてくれたのが、中村駿『古き悪き慢性固執シンドローム—日本人編—』。日本舞踊的な所作がずらされることで新たな動きを生む。構成も巧みだった。奨励賞の2人はダンサーとしての魅力が際立っていた。靴音とのデュエットが印象深い水越朋も、空間を意識した動きが見事だった岡元ひかるも、これからが楽しみ。（浜野 文雄）

YOKOHAMA DANCE COLLECTION EX2014